

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

久野正博・津本欣吾・井上勇人・柴原浅行・谷水宗美・井上祐希・久保典敬

目 的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、国立研究開発法人水産研究・教育機構国際水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集を行った。

方 法

1 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ, キハダ, メバチ, ビンナガ)の主要水揚港である和具, 浜島, 宿田曾, 紀伊長島, 尾鷲, 奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。また、前年度に引き続き、クロマグロ加入状況の早期把握を目的とした曳縄標本船調査(GPS ロガーを用いた漁獲実態調査)を実施した。

2 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY 情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況との関連等について検討を行った。

結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「令和元年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向を国際水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価およびそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告されることから、ここでは本県所属船の 2019 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

1 カツオ漁況

1) 沿岸曳縄船

2019 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚量は 79.7 トンで、前年(42.9 トン)の 186%、過去 10 年平均値(99.5 トン)の 80%となった(図 1)。冬春季(1~5 月)は、黒潮内側反流の影響で熊野灘沿岸に漁場が形成され、同期過去 10 年平均を上回る好漁となったが、夏季以降、特に秋季の漁況は振るわなかった。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 39kg/隻と前年(42 kg/隻)並の低水準であった。

水揚げが多かった 4, 5 月の魚体は銘柄大(2.5~4 kg)、中(2~3 kg)が主体で、4 月には特大(4 kg 以上)も混じった。

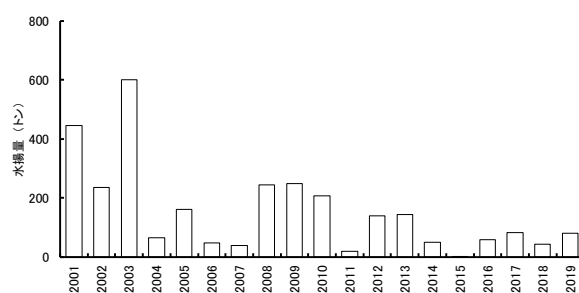


図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

2) 小型竿釣船(19 トン以下)

2019 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 734.9 トンで、前年(616.1 トン)の 119%、過去 10 年平均値(434.7 トン)の 169%と、2006 年以降では最も多い水揚量となった(図 2)。特に、5, 6 月は熊野灘北部沿岸域に漁場が形成され、県内市場に多く水揚げされた。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 1,138 kg/隻と前年(935 kg/隻)を上回る比較的高い値となった。

県内市場の水揚げデータによれば、水揚げの多かった 5, 6 月の魚体は、銘柄中(2~3 kg)主体に中小(1.5~2 kg)、大(2.5~4 kg)が混じり、4~10 月にかけて特大(4 kg 以上)も比較的多く水揚げされた。

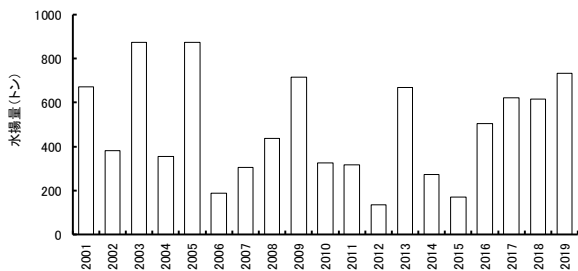


図 2. 小型竿釣船によるカツオ水揚量（主要 4 港）

3) 中型竿釣船

QRY 情報（無線漁況連絡聴取簿）に基づく 2019 年の三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量は 6,238 トンで、低調な漁況となった前年（5,746 トン）の 109%、過去 10 年平均値（6,504 トン）の 96%の近年並の低調な漁獲量となった（図 3）。

操業は、1 月下旬から南鳥島南西（N20~23°，E148~153°）の海域で始まり、3 月までは N25°以南の中南海域主体に操業した。4 月に入り漁場は北上し、伊豆諸島北部~熊野灘北部の沿岸域を主体に操業し、5、6 月も同様の海域（N31~35°，E135~140°）でカツオ主体にビンナガ混じりで操業した。7 月に入り、漁場は房総半島東方（N33~36°，E143~152°）から東北沖（N32~41°，E145~152°）に移り、8 月以降は東北沖（N37~42°，E142~156°）で 11 月中旬まで操業した。

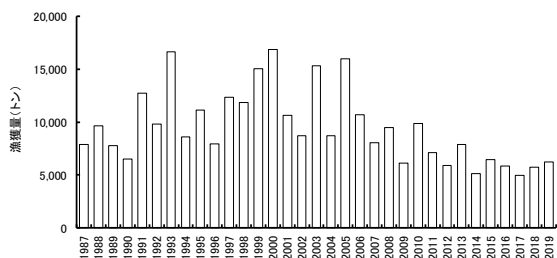


図 3. 三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量

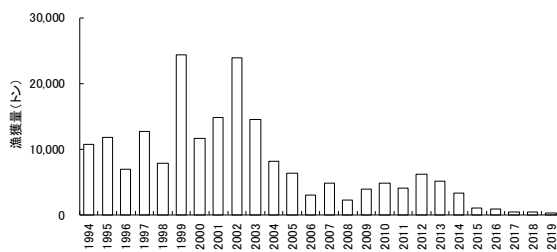


図 4. 三重県大型竿釣船によるカツオ漁獲量

4) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2019 年の三重県大型竿釣船によるカツオ漁獲量は 1,780 トンで、過去最低の漁獲量とな

った（図 4）。2017 年からの漁獲量の大幅な減少は、着業船の減少（2016 年：5 隻，2017 年：2 隻）に起因するところが多い。

2 ビンナガ漁況

1) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2019 年の三重県中型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 1,393 トンで、前年（2,853 トン）の 49%と極めて低調な漁況となった（図 5）。

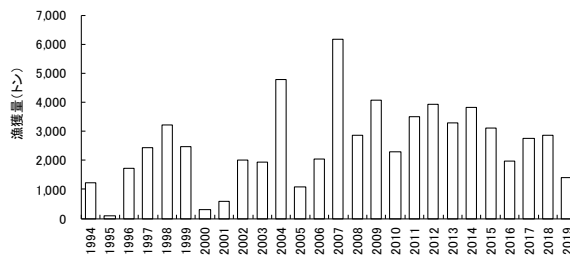


図 5. 三重県中型竿釣船によるビンナガ漁獲量

2) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2019 年の三重県大型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 174 トンで、過去最低の漁獲量となった前年（309 トン）をさらに下回る極めて低調な漁況となった（図 6）。

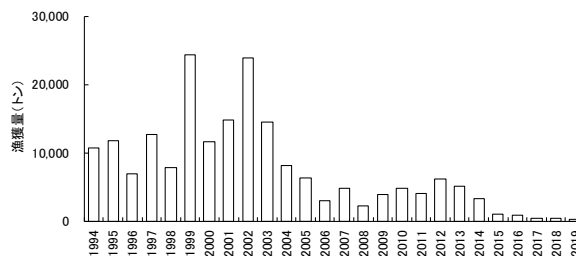


図 6. 三重県大型竿釣船によるビンナガ漁獲量

3 クロマグロ漁況

1) 漁業種別水揚げ状況

三重県主要 6 港における 2019 年のクロマグロ水揚量（全漁業種）は 5.7 トンであった。主な漁業種類は、曳縄、まき網、定置網であった。

2) クロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）の採捕状況

熊野灘沿岸域における 2019 年の養殖種苗用ヨコワ漁（曳縄）は、前年より 1 日早い 7 月 15 日から始まり、8 月 21 日には県内養殖業者の池入れ予定数を満たし、終漁した。標本漁協所属船による採捕尾数と有漁隻数から求めた CPUE は 7.5 尾/隻で、前年（8.6 尾/隻）、前々年（9.4 尾/隻）を下回ったが、極めて低調であった 2012~2015

年と比較すると高い水準であった（図7）。

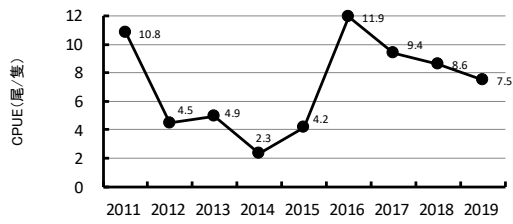


図7. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）CPUEの経年変化

関連報文

令和元年度国際漁業資源調査・情報提供委託事業報告書，国立研究開発法人水産研究・教育機構。

令和元年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括，三重県水産研究所。